
要するに、世界は

水城 麻玖羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

要するに、世界は

【Zコード】

N7156W

【作者名】

水城 麻玖羅

【あらすじ】

気付いたらコナンの世界に転生していた椎名 愛遊「シイナ アコ」

そんなアコは
蘭の事が大嫌い

なら虐めちゃう？

暇潰しに始めた蘭への虐め

「直ぐ壊れないでね」?
おもちゃが壊れて良いのは
アユが飽きたときだから
徹底的に遊んであげるよ」

最後に勝つのは
虐めっ子のアユか
それとも
嵌められ虐められている蘭か

- ・キャラ嫌われの話です
- ・オリキャラ出でます
- ・とにかく蘭が虐められます
- ・新蘭? そんなのナイナイ
- ・とにかく蘭が虐められる
- ・暴力表現あります
- ・暴力表現あります

- ・転生トリップです

- ・新一はコナンになりません

- ・オリジナルと捏造激しいです

虐めが嫌いな人・蘭が好きな人は見ないで下さい

この話は

私が自分のホムペで書いている作品の別視点から書いた物です

なので見たことがあるかも知れませんが
パクリとかではありません

皮肉なので御座います

こんにちは

私は

椎名 愛遊「シイナ アコ」

といいます

気軽にアコとでも呼んでください

帝丹高校一年B組の

女子高生です

私は

前世……とでも言つておきましょうか……

その記憶があるのです

その記憶が戻ったのは

三歳位の時に

フツヒ

頭に沢山の情報が流れこんで来て
私は前の自分の事を思い出したのです

前の私は何処にでも居る
平々凡々な女子高生でした

将来は何してんのかな
とか考へてゐる

普通の何処にでもいる女の子でした

そんな前の私が死んだのは
雨の日の事です

傘を差しながら
ぼんやり道路を見ていると青になつたので
渡ろう
と一歩を踏み出したとき

大きな音がして体が宙に浮き
浮遊感気持ち悪！

と考えてみると

軽て

何かに引っ張られるみたいに地面にたたき付けられて意識が壊れたビデオの様に途切れ真つ暗になりました

そこまでの前世の記憶が鮮明に思い出し

ああ

自分は一回死んだんだなあと理解しました

何故

前の記憶が在るのかはわかりませんが

今の世界は

名探偵コナンの世界の様です

が

パラレルワールドみたいな世界みたいなですね

新一君はコナンになつてないんですから

まあそんな世界でも
生きていこうと思います

ある人間が（前書き）

主人公の愚痴です
新蘭入っています
主人公腹黒いです

こんな駄文ですが
見てください

ある人間が

ああイライラする

「新一 おはよー!」

「蘭おはよー」

なんですか?

二人の赤くなっている顔は

肌寒いはずなんですが…

ああ気持ち悪い

鳥肌がたっているのはアコの所為ではありません

「何あれ? うざい」

「キモくね？毛利」

「正直「つぞーい」、ねー」

「ねー、ホント」

女子の絶対零度の視線で教室が凍りついてるんですよ
南極ですか？ここは
ペンギンさんいらつしゃいませんかー？

…いませんね 当たり前だ

「ヒューー！朝からお二人方ラブラブな様子で？」

「つーもつ園子…からかわないで…！」

またまたKYが来ましたよ
ホント何なんですかこの二人は

この空気に気付かないなんてどれだけ馬鹿なのですか

あ…馬鹿でしたね

本当にいたいですね

壊したくなります

いや

わつ壊しきこまつ

びつはづから

つかまつ?

もつん毛利蘭です

どれだけ遊んだら壊れますかね

楽しみです

「 さやあ！！」

美術の時間なう

手始めに脚を引っかけてみましたら
派手に転びましたね

しかも私が脚を引っかけた
と気付いてはいません

馬鹿でしょ？

いいえ阿呆です

丁度転んだ先には完成したばかりの風景画があり

思い切り汚ね～絵の具の混じつた水をぶちまけましたよ
綺麗な絵が台なしになってしましましたね～

「あ……ミキの描いた絵が……酷い」

「「」……「」ぬ」

絵は仲が良い四人グループの一人
ミキが描いた絵です
こんな風にされて
後の三人が黙つているはず無い訳が無いですよ

「ちょっとーーー！」

毛利？何してくれるの？

ミキつちの一生懸命描いた絵が台無じじゃんーー！」

「そうよーーー毛利さんサイツ テーヒナの親友虐めるなんてヒナ許
さないし
ミキちゃん気にしないで?
まだ直せそう？」

二人のギャルっぽい女の子達のヒナとアヤメが怒り気味に怒鳴つて
きましたよ

ミキが大好きですからこの一人は

「ううん……殆ど水がかかって滲んでるから描き直すね…」

ミキという子は涙を皿に溜めながら
新しい画用紙を取りに行つた

あ～あ～
酷いものですね～

周りから見たら

せっかく書いた絵を台無しにしてしまつたんですから
周りの目が冷たくなつてきましたよ
だけど蘭は気付いてはいませんね
どれだけ鈍感なんですか
そんなどころが大つ嫌いです

「ミキ… 一生懸命描いてたのに… ねえ毛利
もしかして「転んだの態」と?」

何時もミキ、ヒナ、アヤメと一緒にいる親友のハルも声を抑えてい

るが怒りが滲み出ています

かなり怖いですよ

彼女には逆らいたくありません
普段はクーデレキャラなはずなのですが

「酷一

毛利つてそんな子だつたんだ

そんなこと無いってウチもヒナつちも信じてたのに

マジ幻滅

「ねーヒナもアヤメちゃんに同感」

「違つ……態とじやないわ……」

「ビーだか

蘭は泣き声に泣き声ながら否定していくますがね～
軽くキモいです

ハル、ヒナ、アヤメは親友を傷付けられた怒りで
許す気にはなれないみたいですよ～

「ねえハル、ヒナ、アヤメ
ミキ大丈夫だから

また絵描くからいいよ
毛利さんも転んであんなっちゃったんだから
あそこに置いとくミキも悪いし
「

「ミキちゃん……優しそぎ
惚れそつ」

ヒナはミキの小さい体をギューッと音がするくらい抱きしめたので
苦しそうだが嬉しそうに「苦しいよ」と言えば小さな体からヒナが
慌てて離れた

ミキさん…マジ天使ですか?
可愛すぎます

「ミキ、いいの?」

「うん」

「先生——ニキつち絵を提出するの遅れるかもしけないけどいいですか——？誰かさんの所為で」

「……ええ」

先生も顔を顰めていますね

そりやそーですか

だって「優等生」の蘭が態とらじく絵を口無にしてしまつたのですから

あ、チャイムがなりました
多分休み時間には始まりますね

楽しみです

ミキ	髪型ボブで小動物系
一人称ミキ	
ヒナ	金髪天パで二つ結い
ちょいギャル系	

名前のあとには～ちん

一人称ヒナ

アヤメ
茶髪で外人顔の大人系

ギャルは入つている

名前のあとには～つち

一人称ウチ

ハル
黒髪ロングの綺麗系

四人の中ではお姉ちゃん

一人称私

と言つた

「最低ねアンタ」

「人の絵台無しにするとか……
有り得ないから」

「調子乗つて
正直ウザつたいんだよね」

「工藤君の幼なじみだっけ？」

高が幼なじみの癖に工藤君と馴れ馴れしいんだよ

はい

こんにちは

私椎名愛遊は今

今体育館裏で行われているイジメシーンを影から見ています

勿論当事者は毛利蘭ですが

うちのクラスの女子五人くらいが虜めていますね～

蘭は何も言わずただただ俯いて黙つて居ますね～
軽くウザつたいですよ～っと

私は新商品の○ツキーを片手に見学中です

「何とか言えば？

例えば「私を傷付けたら新一は黙つて無いわよ～～！」とか？

「あはつ～～超ウケる
てかキモい」

「てゆーか

「工藤君も可哀相だよね
こんな奴が幼なじみなんて」

「あーそうだよね
しかも親友の園子ちゃんは尻軽つて有名だし」

「えー
とゆーことは

誰にでも股開く女と親友な子が
工藤君の幼なじみってわけね
工藤君のお株はだだ下がり

「わあお 可哀相だな 」

「じゃーね
幼なじみさん」

と言つた後笑いながら五人は居なくなりました

「あのさ~

園子ちゃんてやつぱり尻軽だよね~

「つー…見て…たの?」

私は影から出て来て一言

だつて~そつちの方が
面白そうじやないですか~

「当たり前じゃん
アユは~園子ちゃんに

「いっぽいいい男の子達紹介してあげよつかな～？」

あは～
アコつてば優し～」

パン

と凄い音が響き

左側の頬には凄い激痛
殴られましたよ～

「私の事はい～……だけど園子のことを馬鹿にするのは許さないか
ら～！～！」

馬鹿かこの女

本気で思いましたよ～

友達の為?どれだけ自己犠牲心豊富なんでしょうか～

いまのが自分の首を締める事になるなんて
思つてもいないでしょうね～

私はニヤツと笑みを浮かべたら
怯えた顔をされました

失礼ですね但笑っただけなのに

あ、言つておきますが私はMではありません

IM5（今から泣き出す五秒前）

それでは
せ～のっは～！

「.....わあああああああん！-----！
うわあああ-----！-----！-----！」

「おこ！-----

セ～のっは～！-----！」

わあ～先生ナイスタイミング～
声が聞こえたんですね～

よかつたよかつた

「先生……ヒック……急つ……ヒック……」毛利さんがヒック
「邪魔なんだけど調子乗るな」
「つてアコの……頬を……叩いて……きたんです……」

先生は驚いた様な顔をして蘭を見た後
アコを見て顔を顰めて

「毛利、後で職員室に来なさい」
普通ここで
工藤新一君が田代へるといひすが田代もせん

あれ? なんで工藤君が出てこないかって?
丁度今日は工藤君休みなんですよ
こんなに丁度良く来ることはありますんよ~っと

漫画じやあるまじ

「あはは~ 馬鹿だね~
まあ別にいいけど~
停学~?」

させないよ~
だってこれからアコ達がもつともつと苦しませてあげるんだから~

折角の玩具はやつべり壊したげるよ～

「どうした…」

「自分で考えなよ～」

そう言つてアゴは～
赤くなつた頬のまま泣きながら走つて行きました

何故かつて？

このじとを咎める為ですよ～

段々面白くなつてしましました

だけど

停学～？させないよ～

だつてこれからアコ達がもつともつと苦しませてあげるんだから～
折角の玩具はやつくり壊したげるよ～

どうこいつひと？

蘭は昨日の言葉が頭から離れず雨の降る音と共に響いている

不安が混じったもやもやした気持ちのままだが
頭を切替え学校に向かった

「おはよー」

ガラガラと窓を開け挨拶をして返つて来たのは

トイレにあるバケツの水

「…………え？」

ポタポタと水が垂れる音がやけに大きく聞こえる

「最低だね毛利さん
そんな子だったなんて幻滅したよ」

「俺達毛利さんに憧れてたのに」

「サイツ テー」

「酷いよ毛利さん

なんであんなことしたの？」

クラスのいろいろな人が口々に話す

「…………え？」

蘭は何の話をしているかわからないといつ顔をしている

馬鹿だね～そんな阿呆な顔しても
周りの目が白いのは変わらないし～

「信じらんない！！！」

「わかんないの？」

「なんでこんな日に会つてゐるか？」

「アコちゃんを嘘めてたのに？
自覚無いの？
頭おかしいんじやない？」

「つー？」

「私は嘘めてなんか……」

「うぬやこ、最低
アコを嘘めるのに飽きて
うのミキも嘘めようとした訳？」

ハルはミキの前に守るようにして
睨みながら冷たい声で淡々と話している

カツ「コイイな」ハルは
超カツ「コイイよ」

よくそこまでズバズバいえるな

「違う！！」

「違う違う違ーう

アコつち虐めてるのばれて虐められるの怖くなつた訳?
最低、人間失格」

アヤメはケラケラ笑いながら蘭の肩を押したら
蘭は倒れてしまった

空手やつてるのに

そんなのも避けれないんですか

「アヤメちん

人間失格って太〇治の小説だよね?

ヒナその話好きだよ

「それじゃないから

アヤメとヒナも蘭を見る目が一層冷たくなつてこる

「あ…………あた…………し…………な…………」

蘭は恐怖で言葉が上手く出ない

あは～

良い氣味だ

「おはよーーーー！」

ギリギリセーフだよね！

蘭おは…………蘭ー！？

園子は慌てて蘭の元に駆け寄る

「ちゅうとー？」

なんで蘭がこんなにびしょ濡れなのーー？

「ああ！！大丈夫だから！」

傘飛ばされちゃって濡れちゃつただけだから」

園子に心配かけたくない

蘭は引き攣つた笑顔で返すが

園子は気付いたらしく

新一の席を見るが誰も座っていない

今日も工藤君は休みみたいですね～

「わかった…

馬鹿だねー傘飛ばされるなんて
ほらジャージとタオル」

「ありがとう

着替えて来るね」

ザワザワと何時も道理騒がしいクラスに

ガラガラと戸を開ける音がした瞬間に静かになつて
音源を白い目で見る

その先には毛利蘭

「蘭！おはよー！」

「おはよー園子！」

園子は周りを気にすること無く話しかける

が

周りの空気は変わることはない

その時またガラガラと戸が開く音がした

ପାତ୍ର-ବିବାହ

「随分休んでいたな！サボりか？」

「違げーよ！」

久々に登校してきた工藤新一は幼なじみの蘭に挨拶をしようとした

「蘭おは……」

「工藤君才八ヨー！！！風邪？大丈夫？」

「才八ヨー工藤君

随分長々しかつた休みだつたね」と

「おっはー工藤君」

「ああああ

「工藤君、休んでる間ノート取つて無いでしょ？
はい、休み分まとめておいたよ」

「//キちゃん優しーい

何処かの誰かさんと違って

いろいろな子が一気に話しかけてきた所為で蘭に話す事があつたのに話せなかつた

いやクラスの皆が話させなかつたのかもしけない

まあ放課後にでも話そつと思つた

が

もしもこの時無理にでも話をすればあんな事にならなかつたのかも
しないのに

イイコト考えた

アユは

薄笑いを浮かべながら
新一と蘭を交互に見た

人間は

新一は直ぐ気付いた

蘭がクラスに虐められていることに

自分が風邪を拗らせて休んでいた時に何があつたんだろうか

クラスの奴に聞いても言葉を濁らすばかり

新一は蘭の事が好きである

昔からずっと蘭を想い続けていて

今日にでも告白しようと思つて来たら

なんで蘭が嫌われてんだ？

嫌われる要素なんて蘭には無いはずなのに

わからない

「工藤君～」

確實に工藤は蘭のことが好きだから利用出来そうだな～

「…なんだ？」

「知りたい事があるんでしょ
アユ～教えてあげるよ
知りたかったら
放課後教室で残つてて～」

返事も聞かないでアユは歩いていったよ
だつて面倒だし

放課後になり

アユは教室で待機中

ですが

教卓にだれか隠れてるみたいですね

ま

面白そうなのでほつといひか

こんなに上手くいくとは
思って無かつたけど

やっぱり

この世界の人間も一緒だな

クラスが蘭を虐めているのは

自分の意思

切つ掛けを作ったのはアユ

この世界の人間は
自分や周りとは違う人間を
二つに分ける癖がある

尊敬し、

親しみを持たせる人間
と

敬遠し、

罵倒する気持ちを持たせる人間

の二つに分ける癖

アユと蘭は似ている

しかし

アユは前者
蘭は後者

に分けられた為

アユの作成するシナリオが
ここまで上手くいった

このゲームに名前を付けるとしたら

だからだろう

異端

この世界の

多分自分は

面白い頭脳推理ゲームをしている
と言つ感覺に襲われる

瞳は多分歡喜に染まつて
いる
と言つた方が正しいだろう
そつ考えると笑いが混み上がる

もし反対だつたら
アユが虐められていたな

なんて付けよう?

ビーハーブ

アユ

と

蘭初めとする

コナンの登場人物

どちらが勝つんでしょう?

楽しみからか

口角が上がってしまいます

駄目ですね

しつかり無表情にならないと

その時

教室の戸が開く音がした

ハイスト

放課後

入ってきたのは工藤だった

アコは
口角を上げニヤア、
とでも
音がするような笑みをした

「ヤツホ~

工藤君やつぱり来たね~」

「椎名…お前蘭に何をした?」

「もう椎名じゃなくて
アコつて言つてよ~」

ケラケラと馬鹿にした様に笑つアコとは正反対に
新一は真剣そのものだ

「とほけるな

やへんこわへい
と思わないから

「… もへやつぱり探偵には

敵わないか

そうだよ

私が蘭を嵌めたの～

「つー何で…

「何でつて……暇潰し?」

キヨトンと当然とでも云つてゐるアゴニ
動搖を隠せず

近くまで近付いていたアユに気が付かなかつた

馬鹿だね

このくらいで動搖するなんて

隙だらけだよ

「はいこれ対価ね
ボイスレコーダーか
ふふ～こんなのに気付かないほど馬鹿じやないよ～」

新一の手に隠し持つていたボイスレコーダーをひょいと取り上げた

「…」

「愚か」「ばか」だね

ほんと…みんな愚か」「ばか」

刹那

手からボイスレコーダーが落ちていき踏み潰した

バキ

と鈍い音がしてボイスレコーダーが破壊された

馬鹿馬鹿皆馬鹿

アユは笑いが止まらない
ふと止んだと思つたら
また気持ち悪い笑みを浮かべた

「蘭ちゃんを助けたい?」

「……は?」

わあ～間抜け顔

「別に暇潰しだから～止めてあげてもいいんだけどな～
ま
新一君次第だけどね」

アコは面白に事思つこちやつた～

なのですか

「アコと付き合つて～」

「つー？」

「いやだ

俺はお前じやなくて蘭の事が好きなんだ
お前とは付き合えない
かな～言いたいことは～」

あれ～

明白に動搖してゐし～
わかりやす～！

「つー？」

「気付いて…」

「だから～

付き合つてよ～アコと」

「嫌だ」

「む～…」

聞き分けのない子は嫌いだよ～？」

そう言って

自分の整った制服を乱していく
自分の首筋にはカッターを当てて
僅かだが血が流れしていく

軽く痛いし～

まあリアルだからいつか

「さて～

若しも

此処でアユが大声を挙げたら～
どうなるのか分かるよね～」

「つづ～～～」

「もう一回聞くよ～？

いま此処で断つて～

最低男のレッテルを貼られるのと～

いまアコと付き合って
蘭を諦めると
どうがいいか分かるよね~

だからなんで笑ってるだけなのに
怖がるかな~
流石のアコでもキレちゃうぞ
と言いたいな~

「つ……分かった
お前と付き合つ

「よしよし~
聞き分けのいい子は好きだよ
それじゃあキスして~?」

「なつ……~?」

蘭を助ける為……でしょ~

と話している間に
足音が近付いてくる

工藤君は気付いて無いみたいだけどね

「……

段々と工藤の顔が近付き
唇に柔らかい感触が

わあーお
ちゅーされちやつた 黙れ

「し……新一？」

「つー……蘭ー！」

ナイスタイミングだね
蘭さん

致し方ありませんの

蘭は

信じられない光景を目にした

新一とアユが
キスをしている所

携帯を教室に忘れたことに気付き
取りにきたらこの光景を目にした

なんで?

なんでキスするの?

「……………」

何故か涙が止まらない

「…………」

気付いたら走っていた

走って走って

そこから逃げ出したくて
何度もぶつかりそうになつた

「蘭……！」

いつの間にか追いついていた新一に腕を掴まれた

気付いたら

玄関まで来ていた

なんで追い掛けて来たの?
新一も私を嵌めるの?

蘭の心中は

不安で埋もれてしまつてた

だから

新一の軽く汗ばんだ手を振り払つた

新一はあの子の事が好きだつた
私じゃないあの子が

だから

私は

この恋を諦めます

「……ら、ん？」

「……バイバイ新一」

後ろは見なかつた

見れなかつた

見たら

また

好きになつてしまつから……

諦められなくなつてしまつから……

「…………つ…………」

枯れたはずの涙がまた流れてきた

今日天氣予報では降るはずの無い雨が降つてきた

空が泣いていた

何故

「あはははは！」

教室の窓から見える
今の光景を見て
私は
嘲るよじこして笑った

くだらない

そんなのは所詮

血口満足でしか無いのに

何故わからないのだろう

ほんと皆馬鹿

「ははは……ねえ分かつてゐから出できなよ~。」

ふと教卓に手を向け話し掛ける

すると安心院亜依が表れた

「やつぱりばれてしましましたか」

安心院は

ひょこつ

と音がするみたく教卓から頭を出した
ショートカットの柔らかそうな黒髪が窓から入つてきた風に靡く

「今の事話さないよね

安心院ちやん

だつてあなたも毛利蘭が
大つ嫌いなんだから!~!」

そう話すとつりぎみの手を少し見開き

「こちらを見たがすぐ元の表情にもどった

「はあ……

まあその通りですけどね
話しませんし

私はこの世界の

一般ピープルの皮を被つた

”異端”

ですか？

どういひあるの気はありますよ

あなたも転生者なんですね？」

言つておくけど私は

中一病とかじやありませんからね

と聞こ

ニッコリ笑つた

その言葉に

こつちが次に驚く番だった

「え……マジでか」

「はいマジですよ

因みに

前世はしがない〇〇でした

アコさんは？」

「え…と何処にでもいる高校生…」

「そうですか
ならその素晴らしい頭脳とかやうは
特典つてどこですかね」

羨ましいです

と言いながら笑う安心院はどこか可愛らしく大人っぽかった

「多分夢小説でいえば
あなたは
最強主みたいなもので
私は
傍観主みたいな位置ですね」

安心院さんで夢小説とか見たんだ
と言つと
さん付けはいいですから
と返された

「まあ

これから展開楽しみにしていますからね」

「まつかし」と「！」

これからもつと面白くなるからさ」

なんだか
とても嬉しくなった

理由は多分この話に観客が増えたからだりつと細つ

其の事が

新一へ別れを告げた

次の日

蘭は学校を休み

部屋で閉じこもっていた

色々考えていて

心が疲れた

「.....新一い.....」

諦めたいのに

なんで

あなたの笑顔が頭から離れないの？

周りに信頼されて

輪の中心にいて

新一の彼女の

椎名さんが羨ましい

なんで

私は

そこにいないのだろう

なんで
：

新一は私じゃなくてあの子を好きになつたのだろう

「わかんないよ……」

嫉妬、切望

彼女に対するそんな感情が

ぐらぐらぐら混ざつて

私の脳内を侵食していく

ホントは諦めたくない

だけど

傷付きたくない自分がいる

そんな自分が

大嫌い

「おはよう新一君、元氣ー？」

「元氣に見えるか？椎名」

「見える、なんて言つたらどうするの？新一君」

クスクス馬鹿にしたように笑いながら話すアコは軽く目の赤い新一を見てまた笑みを深くした

「田一、冷やしたら？」

「触んな」

「相変わらずそつけないのね？」

「冗談つぽくいってにいつこり笑う

容姿端麗、という言葉が似合う彼女が笑うと十人中十人が綺麗

だと言うと思うような笑顔だ

だが新一にとつては違和感がある
と言つた方がいいだろうか？

気持ち悪いのだ。

彼女が

「なんで笑つてんだ
気持ち悪いんだよバーロー」

「そー？」

「酷いなー新一君は」

蘭ちゃんだったら鼻の下伸ばしてテレトレスするんだろうなー、
と馬鹿にしたように話すと
新一は憎しみを込めて睨んだ

だが話は終わらない

「全く蘭ちゃんも可哀相だよね
こんな馬鹿に恋して裏切られて

まあどうでもいいんだけどねえ？」

「黙れ」

「つむさーなーお前にはそんな戯れ言云つ權利は無いよ新一君
蘭ちゃんをどんな形であれ裏切ったんだ
そんな守る覚悟の小さい馬鹿はどこかの女の尻でも追いかけてる」

「つー」

まるで別人の様に話すアコに恐怖感を抱く

「なーんてね、一応付き合つてんだから一緒に行こー？」

「…………

「「これは命令だよ?」

「…………何でお前は蘭を苦しめるんだよ?」

「え? そりゃあ暇つぶしだって言ってんじゃん?」

下らない質問は止めれば?

そりゃあひどいこと歩いていった

アコに言われた言葉が頭で繰り返される

新一はどうすればいいのか、

と必死に考えたが答えは見つからなかった

少女Aの考察

「やっぱり不思議だな……」

だってそうじゃない?

殆どの人間に好かれて十人中十人が好き、だなんて夢物語でも有り得ないから。

なのに、椎名愛遊は殆どの人間に好かれて勉強、運動はこの学校に上位にいる。

しかも誰にでも優しいいい子だから周りに人が集まる。

なんだか完璧過ぎて気持ち悪い。

人なんだから、欠点とかあると思う。

なのに、あの子の欠点という欠点は見つからない。隠しているのかな?

このことを数少ない友人の安心院ちゃんに話したら、同意してくれた。

けど、怖い顔して愛遊さんに気持ち悪いとか言っちゃ駄目だよ。なんて返されちゃった。

そうだよね。傷付けるつもりじゃないのに傷付けちゃつたら嫌だからね。

もしも椎名さんと言つちやつたらなんかされそうだし。

虐められてる毛利さんは多分、椎名さんに嵌められちゃつたんだと思つ。

だから、周りから嫌われてたのに更に嫌われちゃつたしな。『愁傷様。

そういうえば毛利さんが嫌われる原因はやっぱり工藤君なのかな？毛利さんは素敵で可愛い普通の女の子なの。

「どうしたの？」

「ひりん、なんでもないよ」

まあ、別に

私には関係の無い事か。

移動教室だから急いで行かないよ。

あ、そういうえば、今日毛利さん今日休みだつたな。工藤君は日が少し赤かつたし。

あと椎名さんイライラしてたな。ストレス溜まつてるか女の子の日なのかな。

駄目だよ、イライラしてたら肌が荒れちゃうよ。

周りは気付いてないみたい。普通気付くよね？
椎名さんのお友達“じつけ”反吐が出そう。我慢我慢。

「急がなきゃ遅れるよ。」

「うん、」

ああ、そうだった。急がないと。
私と安心院さんは急いで教室に向かった。

出来ないのか

「鈴木園子さん？ ちよつといいっ？」

「…何？」

あは、睨まれちやつた

だけど、園子に睨まれる筋合いは無いんだけどなー。蘭に睨まれる筋合いはあるけどー。

あ、そういうえば、なんで呼んだんだっけ？ あ、そういうへ。

「園子さんに頼みたいことあつたんだー」

「名前で呼ばないでくれる？
不愉快なんだけど」

「あは、じめーん！ 鈴木さん
ちよつとお願ひ聞いてくれるー？」

「嫌よ」

あは、速答！

いくりなんでも傷ついたやつぞ
てへペろ…うわ気持ち悪！

「……ふーん、蘭ちゃんがどうなつてもいいんだ?

鈴木さんつて友達を見捨てる様な奴だつたんだねー? サイテー」

「つ!

……頼み事つて何?」

おーおー、理解が早くて助かるわー。ある意味蘭より園子の方が頭良いかもね。

だけどなー、やつてくれるかな?

ま、友達思いの優しい優しい園子ちゃんだつたらやつてくれるよね?

「それはねー、蘭ちゃんをカッターで傷付けて欲しいんだー。

あ、勿論顔以外の場所でね!

傷はー…」

「ふざけないでよ!

そんな事できるはずないでしょー! 蘭は大事な親友よ?
バツカじやない!?

うわ、超顔真っ赤なんだぞー。ウケるー。てゆーか、人の話は最後まで聞こうよ。

「あー、五月蠅いなー。

そんなにやりたくないならやらなくていいよー。

大事なお友達の蘭ちやんはアコがぐわぐわに原形が無くなるくらい刺して息の根を止めてあげるから。」

なんつって。嘘だけビー

うわ、血の氣が引いてくみたいに顔真っ青ーー。

あれ、てか涙田じゃね? わー、鈴木さん虜めちやつたー。

「せぬからーせぬから蘭には手を玉れなこでーお願いー。」

「べーー・どひしおつかな?」

急に意見を変える子は信用出来なこじゃー。

あ、良ここと思こついた!

園子、土下座して

『お願いします、椎名様。私にやらせてください。喜んでやらせていただきます。』 って言つたら蘭ちやんには私から手を出さないであげる。』

ま、やすがにプライドの高い鈴木お嬢様が土下座なんかするはず無いナビ?

つて、思つていたけど、土下座したよーのナービだけ蘭が好きなのが。馬鹿じやん。

「あ……『お願いします、椎名様。私に、やらせてください。喜んでやらせて、いただきます。』

「」

言い終わると同時にぴろりん なんて場違いな音が響く。

誰が鳴らしたって？

はいはーい、アコちゃんです！

丁度ケータイでムービー撮つてたからね！

あは、園子顔真っ赤！ウケる！

私はポケットに入っていた可愛らしきデザインのピンク色のカツタ
ーを取り出し、刃をキチキチ、と音を鳴らしながら長く出していく。

これ、お気に入りの奴なんだけどなー。

結構可愛いんだよね。赤地に白の水玉のリボンが付いてて。

顔を上げている園子の喉に刃をピタリ、と当たって、私はニッコリ笑う。

園子は恐怖感からか、震えた喉に軽く刃が当たり血がながれる。

「もし、失敗したら、アコが蘭ちゃんを殺しちゃうかもしれないよ
だから、失敗はダメだヨ？
そーのこちやん？」

ひゅ、と声が出すに空気が口から漏れる音がする。

「あはは、間抜けな顔しちやつて？」

やるのは明日の放課後、四時半に教室ね？
あ、このカッター使っていいよ？

それと、手加減とかしてたら、分かるよね？
じゃあね。友達大好き園子ちゃん？」そのあと、アコが居なくなつた後の廊下では嗚咽の音が静かに響いた。

「蘭……蘭……」

園子は、噎び泣くように大好きな親友の名前を呼んだ。

ふと、涙で歪んだ景色の中、

二人の男女が見えた。

一人は、先程まで此処に居た、椎名愛遊。

もう一人の人物の顔が見えたとき、絶句した。

なんで工藤君が、椎名と居るの？

園子はぐるぐるしている脳内を整理しようとしても、もうじきぐちゃぐちゃになる感覚に陥つた。

悲しきて（前書き）

あてんしょんふりーず。

今回の話には死体の表現やらがちょっと飛び交っていますので
苦手な方はバックふりーず。 でお願いします。

悲しくて

蘭が暗い顔をして、教室の前に立つ。深呼吸をして中に入ると、教室が一気に静かになつた。

と、同時に嫌悪、嘲笑の瞳を向けられる。蘭はただただ黙つて、花が置かれている自分の席まで行つた。机には鉛筆で書かれた大量の悪口やらの言葉の羅列。消していると机の中から力サ、と音がした。

「…？」

何気なしに机の中に入れる、指に鋭い痛みが走る。何が入つているのか、と中を見て悲鳴を上げ、尻餅をついた。

鼠か、何かの小動物に深々とナイフが刺さっていた死体が入つていた。

余りのショックに涙がこぼれる

「うわ、気持ち悪。
てか、汚い。」

「臭い」

「さつさとがたづけてよ

クスクスと笑いながらこの光景を見ているクラスメイト。だが、蘭はショックで腰を抜かしてしまつたらしく動けない。クラスメイトの一人、小崎千歳が、蘭に舌打ちをして近づいた。

「さつさとかたづけてよ? ブス!

それとも、仲間の死体なのに片付けられないの?」

ガンツと机を蹴つた拍子に中の死体がずるり、と蘭のスカートに落ちてきた。ベチャツと生々しい音が響く。周りの人は異臭に眉を潜めた。

「ちょっとー臭いんだけど。

あーー! そうだ髪洗つてあげましょうか? ねえ、……」

小崎は隣にいた友人、三笠律にヒソヒソと何か言つや、顔に花瓶に入つていた花ごとぶつかけた。

「草の臭いがしていいんじゃない?」

にやにやしながら見ている彼女、小崎の隣に先ほどの友人、三笠がきた。

手には汚いトイレにあるモップ。

それをあらうことか、蘭の頭に擦りつけた。「ジジシ、と力強く押し付けて、笑いながら言った。

「あんたみたいなブスがアコちゃんを虐めるとか、百年早いんだよ。いつとくけど、アコちゃんの受けた痛みはこんなもんじゃないから」

「わたしあは誰さんを虐めてない！」

「信じんぐう！」

「汚い口で話すなよ。
歯ブラシもしてあげるー！」

口にモップを押し付けられる。余りの異臭に吐き気が込み上げてくる。

すると、ふ、と顔にあつた物が取り扱われた。目の前にはモップを取り上げた新一。

「く……」「藤君」

「なにしてんだよてめえ等ー！」

「つ……」「藤君酷いよー」

律達と藤君とアコちゃんの為こしたんだよ？」

「何言って……」

「蘭ちゃん大丈夫？」

「これはどうこいつ」と?」

椎名愛遊も現れ、二人は軽く不安の色が現れながら、アユの元へと歩いた。

「ア…アユちゃん!これはね、アユちゃんと工藤君の為にしたことなの!」

「ん? いーよ。ありがとー。」

とりあえず蘭連れてくね保健室に」

「アユちゃんの制服汚れちゃうー!」

「大丈夫だよー」

そのあとアユは蘭を引きずる様にして歩いていった。そして着いたのは誰も使わなくなつたトイレ。

前もつて用意していたのか、バシャ、と水をぶつかけた。

「うわ、ウケる。

『写メつちやるから、はい、ピース』

べほ、なんて間の抜けた音と共に携帯画面に蘭が映つた。

仕方ありません

アコと蘭が居なくなつた後、園子は屋上近くの階段に居た。見ていられなかつたのだ、蘭を。

これ以上蘭が傷付くところなんて見たくもない！

そう思いながら顔を膝に埋める

カシャン、と音がして、何かが落ちた。身体をびくり、と強張らせ、それを見ると可愛らしい装飾をした、カッター。

見た途端、首に鈍い痛みが走る。

椎名愛遊に恐怖感、嫌悪感が、園子の感情を支配する。

それと同時に、自分の無力さに腹が立つ。

カッターをしまいまた、顔を埋めていると、スカートの中にある携帯が震えた。

カチカチ、と当たる音にいらいらしながら携帯を開けると驚愕した。

「蘭つ……！」

そこにはボロボロになつた蘭の姿。

メールには、不釣り合いな可愛らしい「トコメで飾られた文章が書いてあつた。

可愛い蘭の写メあげちゃつ！

因みにここはある校舎のトイレだよん（^○^）

分かるかな？

早く見つけなきゃ駄目だよ？

また、蘭ちゃんがボロボロになるのを見るのも楽しいけどね！-！○

（ ）。

園子ちゃん、ファイト

園子は血相を変え、階段を降りて行った。田は赤く充血し、怒りが
籠っているのが分かる

「椎名…………椎名椎名椎名椎名椎名椎名椎名椎名椎名…………

あの女…………絶対に許さない！

調子に乗るのもいい加減にしなさいよー！

「誰が調子に乗ってるって？

「つざつたいんだけどー。」

園子は脚を止め、横を見ると、椎名愛遊。踊り場で携帯を力チカチ
といじりながら、氣怠そうに欠伸をした。

園子はそんなアコとは反対に顔を真っ赤にして、睨んでいる。

「…………椎名あ！」

「あんたでしょー！このメール送ったの！」

「蘭を何処へやつたのよー！言え！」

「うつぜ……何の事ー？勘違いご。

気違ひ女の蘭ちゃんの事なんかアコ知らなーい

「ふざけないで！あんたしか居ないのよー！」

「だから知らねーって言つてんだよ。

てか、気違ひは普通助けないのが当たり前じゃねー？
ばっかじやん。

今頃蘭ちゃん可笑しくなつてるんじやないかなー？

あはははー！考えたら見たくなつちゃつたー！ヤバいウケるんですけどー園子ちゃんさー、今日頑張つてねー？しぐじつたら殺しちゃうから？」

園子はせつめいされた途端、頭が真っ白になつた。
そして、彼女に込み上げる物は本能的な恐怖。
この女は本気だ。本気で蘭を殺す気だ。

園子は無意識に笑つてているアコをドン、と突き落とした。アコは、笑顔で落ちていった。

園子がハツとした時にはアコの姿が消えていた。ドササー！と下で音がしたので、手すりから下を見ると、アコは新一が支えていた。

「い……たいよ。新一……」

アコは先程迄の真逆の表情をしながら涙を流していた。多分、これは演技だ。

段々と人が集まつてくる。園子は怖くなつてきて、その場から離れ

た。

本当に私がやつたの？

怖い怖い怖い怖い！

園子はガチガチと歯を震わせながら誰も来ない屋上まで走ってきた。

また、携帯が鳴った。園子は震える手で携帯を開くと、先程とは違う、知らないアドレス。

今日しくじんなよ？

しくじつたら大事な大事な親友の蘭を殺すからね？

あ、アユは優しいから園子ちゃんの事は話してないけど、失敗すればうつかりはなしちゃうかもー！

園子は涙がぽろぽろ止まらない。

誰か、誰か、自分を守る為に親友を傷つけようとしている私を止めて下さい。

兀の想ひのせ

「「「めんね園子」」」遅くなつて

蘭は園子に頼まれ、放課後に教室に来るよつて言われたのだ。蘭は、笑顔で園子に駆け寄るが、園子の様子がおかしい。

「…………園子？」

「…………蘭、蘭はさ、私の事親友だ、て言つてくれたよね。今も、そつ思つてる？」

「勿論ー・どうかしたの？」

「な…………なんでもない」

園子は後ろに隠しもつてるカッターをチキ、チキと刃を出していく。蘭はそれに気付かず、不思議そつに園子を見ていく。

「園子？」

「蘭……「「めんなさ」」」

「え？」

園子はぎゅっと目を瞑り、カツターを蘭に突き刺した。つもりだつた。

しかし、カラーン、と音がして、カツターの刃が真つ二つに折れた。
蘭が、咄嗟に折ったのだ。

園子は混乱していると、急に携帯が鳴った。
園子はびくり、と身体を震わせて携帯に耳を近付けた。

『役立つ。あのカツター気に入つてたのに』

園子はアユの声を聞いたとたん、周囲を見ると、向かいの校舎の窓から無表情でアユが見ていた。

園子はその場から崩れ落ちて、嗚咽を漏らした。

「「めんなれ」、「めんなれ」、「めんなれ」、「めんなれ」」

蘭は園子に傷付けられたショックで呆然としていた。

アユは机の上に座つて足を組んでいた。枝毛チェックをしながら泣いていた園子の方を見ていた。

その瞳には何の感情も籠っていない。

「ほんと、園子ちゃんてば役立つなんだからー」

「でもかわいいですよね」

「つまーあー！」

軽くひくひく返りそうになるへりこびくつした。そんなアコを見ながらまた安心院はココアを一口飲んだ。

「ちなみに始めから居ましたよ」

「心臓が凄くバクバクしてるんだけど」

「それはそれは」愁傷様です

いや、「愁傷様じゃねー」と思いながらも気持ちを落ち着かせる。安心院はアコに「コーヒーを差し出して、また傍観を始めた。

「まったくアコをとてば、えげつないですよね」

「褒め言葉をありがと」

「いえいえ本当の事ですか？」

また、アユ達は傍観を始めた。
園子はまだポロポロと涙を流していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7156w/>

要するに、世界は

2012年1月10日23時46分発行